

「プレゼンテーション演習 II」2年目の取り組み —文法指導から考えて作成する英文発表へ—

岡田礼子*1

“Presentation II” in a Middle-Level Class: Grammar Instruction to Help Students Create Original Presentations

by

Reiko OKADA*1

(received on April 19, 2011 & accepted on July 6, 2011)

Abstract

This paper reports on the findings of a required class for second-year students, Presentations II, the goal of which is to develop English presentation skills in an IT field. In the previous year, it was found that a majority of the students in the middle-level classes closely imitated the teacher's model presentation. This action resulted in a low number of original sentences, which was assumed to have come from their lack of grammatical knowledge and/or confidence in creating accurate sentences. The general English subjects were created with the intention to give students enough foundation for the “Presentation II” class. However, it appears not to have been enough in terms of learners creating grammatically accurate sentences. As a result, more grammar instruction was implemented in one of the English Reading classes.

Results in a middle-level class indicated that when compared with the previous year, there was a larger diversity of students' topics, the average length of the body of the speeches increased, and students paid more attention to the structure of the presentation.

Keywords: Presentation, ESP, Introduction to IT English, Grammar instruction

キーワード:プレゼンテーション, ESP, 理系導入, 文法指導

1. はじめに

2010年度に開学3年目を迎えた情報通信学部は、「情報通信技術のみではなく、英語コミュニケーション能力を身につけ・・・英語で研究発表ができる人材を育成すること」¹⁾を目標のひとつに掲げている。筆者を含む英語科目の教員は、専門分野で英語が活用できる力を習得させることをめざして、効果的な教育システムを模索してきた。²⁾³⁾

第1期生の基礎英語科目が終了した2009年度末に、開学からの2年間の指導を振り返り、成果と課題を検討した⁴⁾。その中でまず修正が必要と思われたことは、「英語コミュニケーション」科目の指導の考え方であった。

「英語コミュニケーション」科目(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)では、間違いを気にせず積極的にコミュニケーションをとろうとする態度や途切れずに意思疎通を図る能力(fluency)を重視しがちであるが、理系英語では、正確に読み書きできる能力(accuracy)を優先させる必要がある、という基本的な違いに気づいた。

本稿ではまず、2009年度までの問題点を明らかにし、正確な読み書き能力の強化をめざして2010年度に修正した基礎英語科目(第2期生対象)の指導に

ついて報告する。次に、第4セメスターの専門科目「プレゼンテーション演習 II」(英語による専門分野に関する発表の演習科目)の中位クラスについて、指導の改善とその効果を検討し、今後の情報通信学部における英語指導について考える。

2. 2009年度までの問題点

2008年度に開始した第1期生の基礎英語の指導は、4セメの専門必修科目「プレゼンテーション演習 II」に向けて、学習をどう積み上げていくかを、手探りの中、計画・実施した。「プレゼンテーション演習 II」の目標は、開学時の文書に、以下の通り記載されている。

…英語プレゼンテーションの構成、データや数式の読み方、グラフの説明方法、原因・結果・理由の述べ方、意見の述べ方、提案の仕方、質疑応答などについて英語でプレゼンテーションする際の技術や、日本語の場合と異なる注意事項について演習を交えて指導する。

これらすべてを4セメで学習させるのは困難と考え、2セメ・3セメの基礎英語科目の中で、数式の読み方、グラフの説明方法、原因・結果・理由の述べ方、ITに関する基礎表現などを指導し、少しずつ積

*1 高輪教養教育センター教授

み上げて学習させた。そして、4セメの「プレゼンテーション演習 II」では、英語プレゼンテーションの構成を指導し、アイコンタクト、ジェスチャ、抑揚など、日本語の場合と異なるスキルや、聞き手を惹きつける話し方(delivery)に力を入れて指導し、どの学生も3回のプレゼンテーションを行った。

クラスは学科ごとに、英語力レベルで3～4レベルに分割し、上位クラスのみ理系教員が担当し、残りの中位下位クラスは英語教員が担当した。

セメスター終了時に実施した「プレゼンテーション演習 II」に関する学生アンケートでは、「準備をすれば英語で発表することができるか」という問いに対して、「できる(17.1%) / 少しできる(41.5%)」の合計が58.6%で、半数以上の学生から肯定的な回答を得、未熟ながらも何とか英語で発表する自信を持たせられたと推測された。

しかしその一方、発表態度や話し方に重点を置いて指導したため、形ばかりにとらわれた中身の薄い発表や、教員のモデルを借用した独自性のない発表が多いことが気になった。特に中位・下位レベルでは、基本文法や基礎用語・表現などの知識が不十分であったり、使いこなせるレベルに達していなかったりするため、「専門分野のプレゼンテーション」とは言いがたいものが多かった。上位クラスを担当した理系教員からも、「プレゼン能力は進化しても、英語力が貧困なまま送り出した学生が少なからずいた」とのコメントがあった。

英語で大勢の人の前で物怖じせず話すことに慣れたとしても、伝えるべき内容を英文で正確に作成する力が備わっていないければ、真の意味でのプレゼンテーションの上達は見込めない。「正確で簡潔かつ読みやすい英文を書くには文法知識が必須」⁵⁾であることを考え、2010年度は、基本的文法力・語彙力を向上させ、正確な読み書き能力の習得を目指す指導が必要であると反省した。

3. 2010年度の改善

2010年度、基礎英語科目のゴールを「4セメの『プレゼンテーション演習 II』で独自の英語発表ができること」と定め、文法・語彙・表現力の向上に向けて、「英語コミュニケーション: リーディング」(3セメ)と「英語コミュニケーション: ライティング」(4セメ)の指導内容を改めた。また、その指導結果を受けて、「プレゼンテーション演習 II」の指導方法を改めた。

3.1 基礎英語科目の指導

3.1.1 「英語コミュニケーション: リーディング」(3セメ)

「リーディング」では、週2回の授業のうちの1回を専門分野に関係する読み物を使っている。2009年度は、ITエンジニアを目指す学生向けの教科書 *Information Technology-Workshop* (Oxford, 2003) を使用し、コンピュータ関連の用語・表現の習得をめざした。しかし、独自の英語による発信力の向上につながらなかった。海外の出版社制作のため日本

人学習者に必要な言語的解説がないため、英文構造や語彙の理解が十分できず、自信を持って発信活動に応用できなかったことが原因と思われた。

そこで2010年度は、理工系英語に必要な基礎文法と語彙・表現の学習をきちんとさせ、自力で発信する力を培うことを第1に考えた。使用した教科書 *Essential Genres in SciTech English* (金星堂, 2010) は、社会で実際に使用されている文書を題材とし、理解の補助となる解説と学習すべき表現などが提示されている。そのため、どのレベルの学生にも、理工系英文を理解する力と応用して発信する力を学習させられると思われた。題材として取り上げられているものには、アメリカ化学学会作成の安全規則、イタリア製コーヒーマーカーの仕様書、フランス製湯沸かし器の取扱説明書、ブリティッシュカウンシルの説明会のウェブ登録などがあり、コンピュータ用語に偏らず、広く理工系分野で必要な語彙・構文・表現・様式・などが学習できる。

この教科書を使って、理工系英語の理解・発信に必須の語彙(各Unit約30)と英文法(前置詞, 接続詞, 動名詞, 不定詞, 過去分詞, 関係代名詞など)の指導を全クラスで必須項目とし、必修語彙リストと文法教材を作成した。中間試験は各クラス問題50%と共通問題50%で実施し、期末試験は全クラス共通問題100%で実施した。

3.1.2 「英語コミュニケーション: ライティング」(4セメ)

「ライティング」は週2回の授業のうちの1回で文法中心の英作文を指導している。2009年度は、口頭コミュニケーションでは見過ごされがちな文法項目(冠詞, 前置詞, 動詞, 接続詞など)を選出し、各レベルの学生の能力に合わせて担当教員が独自の教材で指導した。しかし、共通テキストを使用しなかったため、担当教員により指導のポイントが異なり、「プレゼンテーション演習 II」にその効果が反映されにくかった。

そこで2010年度は、*Great Sentences for Great Paragraphs* (Cengage Learning, 2009)を統一教科書として使用し、英作文に必要な基礎知識を統一して指導し、全クラスで毎週小テストを実施し、着実な文法運用能力の習得をめざした。

3.2 「プレゼンテーション演習 II」の指導

3.2.1 既習教材の再利用

2009年度は、第1回目の発表から、各自でテーマを準備させた。しかし、初めての発表の内容と構成を考えて英文を準備することは、中位以下のクラスでは非常に難しく、クラスによっては、教員のモデルをそのまま真似ることになってしまった。

そこで、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の実践例などからヒントを得て⁶⁾、2010年度は、中位以下のクラスでは、3セメ「リーディング」で既習の題材「Safety Rules for Students」をテーマに、1回目のプレゼンを作成させることにした。語彙・表現・文法などを新たに学習する必要がないため、発表の構成に専念でき、独自の英文を作成する余裕が持てるであろうと考えた。

3. 2. 2 モデルプレゼンのビデオ提示

第1回のテーマ Safety Rules についてのプレゼンテーションを、異なる2つの構成で教員が作成し、英語母語教員に実演してもらい撮影した。また、悪い発表例（原稿を読み続ける、スクリーンに向かって話す、日本語が混じるなど）も撮影し、これらをDVDに記録し、必要に応じて授業で見せられるように準備した。それにより、構成の仕方や発表スキル（態度や話し方）を学生各自が自然に学びとることを期待した。

3. 2. 3 表現集と小テストで基礎表現の習得

基礎英語科目での既習項目（文法と表現）に新しいものを加えて、表現集（グラフ説明の表現、意見を述べる際の表現、提案の表現など）を作成し、全クラスで利用できるように準備した。また、英作文の小テストを実施し、言語的基礎知識を定着させ、独自の英文を作成する自信を持たせるようにした。

3. 2. 4 全発表をパワーポイントで

セメスターの間に各学生が行うプレゼンテーションの回数とテーマは、2009年度と同様に以下の通りとした。

- 第1回：情報提供のプレゼンテーション
- 第2回：グラフや表の説明のプレゼンテーション
- 第3回：提案・説得のプレゼンテーション

しかし、2009年度は、中位下位レベルでは、発表内容 (content) よりもむしろ発表方法 (delivery) に重きが置かれ、パワーポイント (以下 PPT と表記) で資料を作成しない学生もいた。そのため、いい加減なポスターで終わらせてしまったり、緊張感がない発表になったりする場合があったため、2010年度は、3回の発表すべてをPPTで作成することを義務づけた。

4. 中位クラスでの実践

英語専任・特任教員のチームで作成した前述の指導計画に基づき、筆者は2010年度に前年度と同じ経営工学科の中位クラスを担当した。各学生が自分で発表の構成を練り、英文を作成し、自分で間違いを見つけて何度も書き直す、という作業をさせることを心がけ、独自の発表を作成させることをめざした。表1に指導の流れを前年度と比較して示す。

4. 1 原稿作成の時間の確保

最初の発表のテーマを、3セメで学習済みの内容「Safety Rules」としたため、1週目に内容と語彙の確認がスムーズにでき、2週目に本論の構成をしっかりと考えさせることができた。2009年度と比べると1週早く始められたことになる。そのため、1回目の発表から、序論-本論-結論の全体を作成させることができた。2009年度の1回目の発表では、序論と結論を述べるだけの簡易型で行い、発表態度の実践が中心であったことと比較すると格段のレベルアップであった。

表 1 14 週間の学習内容

週	2009 年度	2010 年度
1	-英語プレゼンの構成 -序論の基本表現+練習 -モデルプレゼン PPT と原稿	-英語プレゼン構成 -各パートの基本表現 -発表(1)の題材の内容理解 +題材分析(既習教材)
2	-本論の基本表現+練習 -結論の基本表現+練習 -発表(1)の題材の内容理解 (新規教材)	-モデルプレゼンのビデオ -モデルプレゼン PPT と原稿 -発表(1)の本論の構成作成 -PPT の手書き原稿作成
3	-発表(1)の題材分析 -発表(1)の構成作成	-発表(1)の構成確認+修正 (Group + Pair で) -発表(1)の原稿作成
4	-発表(1)の構成確認 -PPT 手書き原稿作成 -序論と結論の練習 -序論で引き付ける表現	-発表(1)の PPT 表記確認 -原稿の英語表現確認 -発音・抑揚・間の練習
5	-発表(1) -ポスターまたは PPT, -序論と結論のみ	-発表(1) -PPT で -序論-本論-結論
6	-PPT での文字表記について -グラフ説明の表現	-グラフ説明の表現, -比較級/最上級の表現, -グラフ説明の3ステップ -間接疑問文
7	-比較級/最上級の表現 -グラフ説明の3ステップ -間接疑問文	-モデルグラフを使ってグラフ 説明と練習 (Pair で) -発表(2)の構成作成
8	-発表(2)の構成と表現 -読んで練習	-発表(2)の構成と表現の 修正 (Group で), -発音・抑揚練習 (Group で)
9	-発表(2) -PPT で -本論のみ	-発表(2) -PPT で -序論-本論-結論
10	-2 製品を比較する表現	-2 製品を比較する表現
11	-製品仕様の比較 (携帯電話:新規教材) -説得する表現	-製品仕様の比較 (湯沸かし器:既習教材) -説得する表現 -発表(3)の構成
12	-発表(3)の構成 -視覚情報 -つなぎのこぼ -説得力のある流れ	-発表(3)の原稿の確認 -英語表現,構成,製品の理 解 (各自→ペア→グループ)
13 14	-発表(3) -PPT で -序論-本論-結論	-発表(3) -PPT で -序論-本論-結論

4. 2 各自で原稿修正

毎回の発表原稿は、2-3週間かけて徐々に作り上げていくが、途中で何度も作成した英文の修正を各自で行わせるようにした。基礎英語科目で全員が同様に文法を学習したため、チェックポイント数点（主語と動詞が入っているか、発表の outline 説明では未来形を使ってこれから話すことを述べているか、conclusion で話し終わったことをまとめる場合は過去形を使っているか、聴衆に問いかける時は you を使っているか、など）を指示することで、全員に自

分の英文の基本的間違いを修正させることができた。

2009年度は、表現上のミス修正などをクラス全体で行うことはなかった。発表スキル (delivery) に時間をかけたため余裕がなかったことも理由の1つであったが、主な理由は、文法基礎知識の統一した指導が事前にされていなかったため、全員がわかるように手短かに説明することが難しかったためであった。

4. 3 学生同士で原稿修正

ある程度、発表の流れが作れたところで、似通った構成またはテーマごとにグループを作り、その中で発表し合い、さらに内容が近い人同士のペアでわかりやすい流れ、論理的な構成に作り直す作業などをさせた (付録1参照)。2009年度は、各自の発表の論理性をじっくり考えて構成させる余裕すらなく、他の学生の発表内容を一緒に考えさせることなど、考えも及ばなかった。

4. 4 モデルプレゼンの文字原稿は提示せず

前年度は、教員が提示したモデル原稿を借用して、独自性のない発表を行った学生が少なからずいたため、2010年度は、モデル原稿を文字で提示することを控えた。基本表現を部分的な例で示すに留め、代わりにモデルDVDを何度も視聴させ、自分で考えて、独自の英文を作成させるようにさせた。

4. 5 ビデオ撮影

毎回の各学生の発表をビデオ撮影し、次の発表のために反省できるように、教員の研究室で自由に見られるように設置した。

4. 6 英文 eメールで PPT を提出

発表前日までに、最終 PPT を提出することを義務付けた。2009年度も同様に提出させたが、2010年度は、必ず英文メッセージを書いて PPT を添付することをきまりとした。

5. 中位クラスの結果

セメスター最後の発表は、2009年度と同様に、説得のプレゼンテーション (似通った製品2つを選び、その相違点を説明し、一方の良い点を強調し、聴衆を説得する) を行った。その結果を前年度の発表と比較すると、以下のことが分かった。

5. 1 発表テーマ

表2は、学生が3回目のプレゼンテーションに選んだテーマと人数を示す。2009年度は、受講生24人が9種類のテーマを選び、そのうち約20%(5名)がセメスター最初にモデルとして教員が提示したものと同様なテーマ「音楽プレイヤー」を選び、別の約20%(5名)は最終発表の準備期間に教員が提示したのと同じ「携帯電話」を題材に選んでいる。つまり、40%強の学生は授業でモデルとして示されたものを真似て作成したものであり、「独自の内容の発表」とは言い難い。一方、2010年度は、27人が13のテーマを選んだ。3回目のプレゼン準備期間に教員がモデルと

して提示したのは、3セメに学習済みの「湯沸かし器」であったが、それと同様な製品比較をした学生は一人もおらず、様々な異なる製品を選び、独自に比較し、それを英文で表現したことがわかる。

表2 最終プレゼンのトピック

	2009年度		2010年度	
	人数	%	人数	%
音楽プレイヤー	5	20.8%	2	7.4%
携帯電話	5	20.8%	5	18.5%
ゲーム機	3	12.5%	3	11.1%
デジタルカメラ	2	8.3%	2	7.4%
保存 Disk	2	8.3%	-	-
自動車	2	8.3%	1	3.7%
TV	2	8.3%	-	-
PC	2	8.3%	3	11.1%
湯沸かし器	1	4.2%	-	-
電子レンジ	-	-	3	11.1%
洗濯機	-	-	2	7.4%
コーヒーマーカー	-	-	1	3.7%
アイロン	-	-	2	7.4%
マウス	-	-	1	3.7%
空気清浄機	-	-	1	3.7%
保険	-	-	1	3.7%
合計	24	100%	27	100%

5. 2 本論部分の長さ

図1と2は、2009年度と2010年度の学生の最終プレゼン英文原稿の本論 (Body) 部分のワード数とその人数を示している (ワード数は10語刻み示す)。2009年度は平均66.3ワードであったが、2010年度の平均は96.0ワードであった。英文で説明する文章を長く書けたことがわかる。

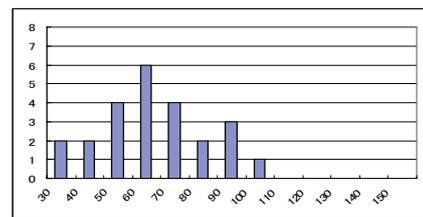


図1 本論ワード数と人数 (2009年度 24名)

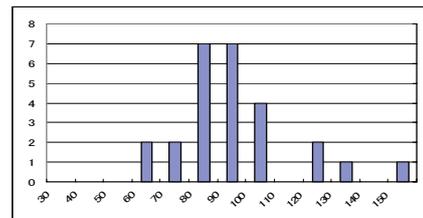


図2 本論ワード数と人数 (2010年度 27名)

5. 3 同一テーマの発表の原稿例

2009年度と2010年度の発表内容を比較するため、多くの学生が選んだテーマ「携帯電話」について、

各年度に評価が高かった学生の原稿の Outline から Conclusion までを表 3 に比較する。(学生の手書き原稿は付録 2, 3 参照)

表 3 学生の発表原稿

2009 年度	2010 年度
<p><u>This is the outline of my presentation.</u> Do you have iphone or ipod? <u>You use your music player every day, don't you? Probably you use it when you are on train.</u></p> <p><u>iphone is similar to ipod touch.</u> iphone has feature for function of call, E-mail. <u>ipod touch has feature for light and expensive than iphone.</u> ipod touch is 20g lighter.</p> <p>Both ipod touch and iphone can listen to music, has a lot of application, has touch panel function. But, difference between iphone and ipod touch is call, camera functions and price.</p> <p><u>I talked about similar points and different points of the two models. I recommend iphone strongly for you, college students.</u> Because <u>very good camera function, many application, and it is good design as other cell phone.</u></p>	<p><u>This is the outline of my presentation.</u></p> <p>I will talk about similar points. First, form of iphone is similar to form of ipod touch. Next, iphone is a touch type and ipod touch is a touch type. Next, you can take a pictures by iphone and ipod touch. Finally, you can play a game by iphone and ipod touch, so iphone is similar to ipod touch.</p> <p>I will talk about different points. First, iphone is a mobile phone, but ipod touch is not a mobile phone. Next, iphone has two color, but ipod touch has only one color. Finally price of iphone is cheaper than price of ipod touch by 20,900 yen because <u>iphone...is...campaigning now, so iphone is free.</u></p> <p>I will say the conclusion. I recommend iphone!! iphone is similar to ipod touch, however, iphone has the <u>things that ipod touch does not have,</u> such as mobile phone, color and etc. <u>If you become want iphone, I'm happy.</u></p>

一重下線部は教員のモデル原稿をほぼそのまま借用した部分である。2009 年度学生の原稿では全体の半分近くがモデルの借用であることがわかる。また、波線部は文がきちんと構成できていない。一方 2010 年度学生の原稿では間違いはあるものの、3 セメで習得した関係代名詞を使って作文したり (二重下線部)、キャンペーン中であることを述べる独自の英文を作成する (点線部) など、工夫が見られ、長さも長いことがわかる。

5. 4 英文メールによる事前提出

発表前日までに英文メッセージをつけて PPT を提出させた。期限の 1 週前に提出した学生に英語のコメントを付けて返信したところ、自分の間違いに気づき訂正しさらに改良し、その結果高い評価を得ることになった。それを知った他の学生も早く提出するようになり、2 日以上前までに最終プレゼンを送ってきた学生は 27 人中 7 人 (26%) になり、他の 14 人 (52%) も教員のフィードバックを期待して 6 時間以上前に送信してきた。2009 年度には、締め切り過ぎ

てから送ってきたり提出しない学生もいたりしたことを考えると、2010 年度は非常に意欲的に取り組んだことがわかる。

5. 5 発表後の感想

表 3 は、3 回目発表の自己採点後に書かせた自由記述式コメントの内容とその人数である (複数回答)。多くの学生が、暗記、アイコンタクト、スクリーンの指差し、間のとり方など、発表スキル (delivery) について感想を述べた。その中で、発表の内容や構成について述べている学生が数名いる。その数は 2009 年度は 24 名中 2 名 (8%) であったのに対し、2010 年度は 27 人中 6 人 (25%) であった。より多くの学生が delivery だけでなく、content をも意識するようになったことがうかがえる。

表 4 最終プレゼン後の感想

		2009	2010
発表スキル	アイコンタクト (不出来/上達)	1	3
	暗記 (不十分/満足), メモ (見た/見ない)	8	10
	間の取り方	2	1
	スライド指差し (できた/できない)	-	3
	緊張 (減った/減らない)	3	7
	スライド作成 (上達)	5	2
	声 (十分/不十分)	2	-
発表内容	構成 (成功)	-	1
	説得力 (不足), ポイント (不明瞭)	2	1
	理由付け (不明確)	-	1
	結論 (あいまい)	-	2
	要点まとめ (十分)	-	1

5. 6 アンケート結果

セメスタ終了時に 2009 年度と同じ無記名アンケートを全クラスで実施した。結果は図 3 の通りである。



図 3 「英コミュ」が「プレゼン演習 II」に役に立ったか (2010 年度)

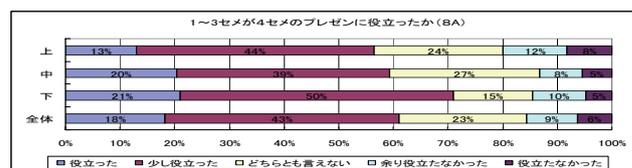


図 4 「英コミュ」が「プレゼン演習 II」に役に立ったか (2009 年度)

2009 年度の結果 (図 4) と比べて、全体としての顕著な変化は見られないが、中位クラスにおいては「役に立った」が 20% から 28% へ増え、「役に立った」と「少し役に立った」の合計が 59% から 66% に増加したことがわかる。

6. まとめ

初年度の反省から指導方法を修正したことにより、中位レベルクラスでは、いくつかの効果があつたと思われる。まず、基礎英語科目で統一文法を指導したことにより、作成した英文を自分でチェックできるようになり、そのため書く英文が長くなった。独自の英文作成に少し自信がもてるようになったのではないと思われる。また、内容を熟知している既習教材を初回の発表題材に使うことで、学生同士で構成や論理性などを話し合えるようになった。さらに、モデルプレゼンテーションのDVDを見せることにより、deliveryの指導に多くの時間をかける必要がなくなり、英文作成や発表の構成(content)を考える時間を増やすことができ、内容に目を向けるようになったと推測される。試みた指導の改善は、中位レベルにおいては、ある程度効果があつたと言えるであろう。

しかしまだ、文法知識も作文能力も専門分野の発表をするには不十分である。今後は、基礎英語科目の中での文法や英作文の指導を、早い時期から開始する必要があると思われる。

参考文献

- 1) 東海大学：情報通信学部の教育方針と教育目標，授業要覧2008 情報通信学部，p9, 2008
- 2) 岡田礼子，中山千佐子：情報通信学部の英語教育プログラム—理念と初年度前期の実践—，東海大学紀要情報通信学部 Vol.1, No.2, pp1-6, 2009
- 3) 岡田礼子・中山千佐子・ヴィーンストラ ジェイ：初年次教育での学習習慣と意欲の喚起—教員連携と学生の自主管理に向けて—，初年次教育学会誌 第2巻 第1号，pp64-71, 2009
- 4) 岡田礼子，中山千佐子：情報通信学部のESPを目指す一般英語科目—第1期生2年間の報告—，東海大学紀要情報通信学部 Vol.3, No.1, pp35-40, 2010
- 5) 村上直久：理系学生の読解・プレゼン・ライティング力を鍛える—大学での実践，英語教育Vol.57, No.3, 大修館書店，2008
- 6) 武田奈々子：Science Presentation in English～すべての理系生徒に英語で研究発表ができる力を～，2010年度東海大学附属高輪台高等学校 SSH 成果報告会資料，2010

付録

付録1 自己点検のための配布資料

(1) 1-8人のグループで、スライド下書きを見せながら、自分のプレゼンの構成を説明しなさい。(日本語でよい)。

(2) 似ている構成の人で2人組(または3人組)を作り、以下について話し合いなさい。

- 誰の情報のまとめ方がわかりやすいか。
- 誰のスライドが聴衆の理解を助けるか。

(3) ペアで1つ、構成がしっかりしたプレゼンの原稿を作成し、新たにパワーポイントを書きなさい。(各ページの原稿に番号を+印でcheck)。

- 論理的で、理解しやすい構成に再構築する。

1. ...	1. (a)	Bodyで使っていないことを、突然 Conclusionで披露しない。
2. ...	(b)	
3. ...	(c)	

— パワーポイントの文字は多すぎないこと。話すことすべてを書くのではない。

(4) 構成がOKであれば、各スライドの説明英文をペアで作成しなさい。(+岡田 check)。

- 明確な表現を使う。□S(目的)→V(→する)→O(→を)。
- 自分の言葉で話せるように。(読音できない言葉は使わない)。
- 長い説明は避ける。

付録2 2009年度学生発表原稿

<p>Outline</p> <ul style="list-style-type: none"> • It has these features • Similar point of I pod touch and I phone • Different point of I pod touch and I phone 	<p>This is the outline of my presentation.</p> <p>Do you have iPhone or iPod?</p> <p>You use your music player every day, don't you?</p> <p>Probably you use it when you are on train.</p>
<p>I phone and I pod touch has these features</p> <p>I phone has function of call, E-mail.</p> <p>I pod touch is light and expensive than I phone.</p> 	<p>I phone is similar to iPod touch.</p> <p>I phone has feature for function of call, E-mail.</p> <p>iPod touch has feature for light and expensive than I phone.</p> <p>iPod touch is 20g lighter.</p>
<p>Similar point of I pod touch and I phone</p> <ul style="list-style-type: none"> • you are listen to music • Has a lot of application (about a hundred thousand) • Touch panel <p>Different point of I pod touch and I phone</p> <ul style="list-style-type: none"> • I phone has function of call • Camera (I pod touch doesn't has camera) • Price (I pod touch 32G ¥45000 I phone 16GB 16 has ¥1500 for every month) 	<p>Both iPod touch and iPhone can listen to music, has a lot of application, has touch panel function.</p> <p>But, difference between iPhone and iPod touch is call, camera, functions, and price.</p>
<p>I recommend I phone strongly for you, college students!!</p> <p>Recommend point:</p> <ul style="list-style-type: none"> • It has 3,000,000 pixels camera • I phone has function of call, E-mail. • It has about a hundred thousand application. <p>I'm sure that you like I phone, because you are young!!</p>	<p>I talked about similar points and different points of the two models. I recommend iPhone strongly for you, college students because, very good camera function, many application and it is good design.</p>

付録3 2010年度学生発表原稿

<p>OUTLINE</p> <ul style="list-style-type: none"> • Similar points • Different points • Conclusions 	<p>This is the outline of my presentation.</p> <p>This, This, This.</p>									
<p>Similar points</p> <ul style="list-style-type: none"> • Form! • Touch type!! • Photograph!!! 	<p>I will talk about similar points.</p> <p>First, form of iPhone is similar to form of iPod touch. iPhone is a touch type and iPod touch is a touch type.</p> <p>Next, you can take a pictures by iPhone and finally, you can play game by iPod touch so iPhone is similar to iPod touch.</p>									
<p>Different points</p> <table border="1"> <tr> <td>Mobile phone</td> <td>○</td> <td>×</td> </tr> <tr> <td>color</td> <td>Two color (black or white)</td> <td>Only one color (black)</td> </tr> <tr> <td>price</td> <td>0 yen</td> <td>20,900 yen</td> </tr> </table>	Mobile phone	○	×	color	Two color (black or white)	Only one color (black)	price	0 yen	20,900 yen	<p>I will talk about different points.</p> <p>First, iPhone is a mobile phone, but iPod touch is not a mobile phone.</p> <p>Next, iPhone has two color but iPod touch has only one color.</p> <p>Finally, price of iPhone is cheaper than price of iPod touch by 20,900 yen because iPhone is compatible with iPod touch.</p>
Mobile phone	○	×								
color	Two color (black or white)	Only one color (black)								
price	0 yen	20,900 yen								
<p>Conclusion</p> <p>I recommend iPhone!!</p> <p>iPhone is similar to iPod touch, however...</p>  <p>Thank you</p> <p>Good</p>	<p>I will say the conclusion.</p> <p>I recommend iPhone!!</p> <p>iPhone is similar to iPod touch, however, iPhone has the things that iPod touch doesn't have such as mobile phone, color and etc.</p> <p>If you be come want iPhone, I'm happy to thank you!!</p>									